高山の文化を高めた人々 28

ユニークな文化人としての代情通蔵

森野 宏

「みっつあま」という呼び方が耳の底にある。代情通蔵氏をこう呼ぶ人たちがいた。昭和二十六年ころの話である。

私が斐太高校十七代の学校長代情通蔵氏に仕えたのは、新任教師としての七年ほどの間だった。スラッとした長身、見事な白髪、品のある風貌、こんな校長さんが、木造校舎の廊下を雪駄履きで歩くのである。

寒い季節の昼餉(ひるげ)時、職員室の大火鉢の周りは代情校長の座談の独壇場だった。小噺風の昔語りのしめくくりは決まって艶めいた話となったが、そのオチが誠に手が込んでいて、若造の私などにはピンとこない、落語で言えば考えオチというやつである。

細かい部分は忘れたが、いろは歌留多にもある「月夜に釜を抜く」という下世話の解釈など正に天下一品だった。酒脱というか、品のよさを失わない座談の名手だったと私は思っている。

また、氏について語る時、よく「代情コレクション」という奇妙な言葉が出てくる。コレクションとは収集品ということで、要するに多様な人材を集めて適材適所に配置し、ユニークな個性を最大限に発揮させる才に恵まれていたということではないのか。一口に「代情コレクション」と言うけれど、一癖も二癖もある人物を束ねていくには、それにふさわしい器量というものが必要で、その点においても氏は懐の深い大人物だったのではなかったろうか。

さて、氏は上二之町筋で醸造業を営む旧家に生まれ、父の茂助は拓山と号した風流人でもあった。またその弟（氏からみての叔父）は垣内松三であり、日本の国語学会の重鎮でもある。城山公園にはその業績をたたえて「石叫ばん」と刻まれた碑が建っている。代情氏の芸術的な素養は、このような家系の中で育てられたものにちがいない。

斐太高等学校長時代

氏は強い郷土愛の持主で、一般に民俗学と呼ばれる分野については該博にして奥の深い知識の持主であった。郷土史関係の雑誌に投稿した氏の著作はA5判四百五十ページの「代情山彦著作集」の中にまとめられ、今日その一端に触れることができる。

また、氏は飛騨の山野にも強い関心を抱き、山岳スキー、登山等の野外スポーツの先駆者であり開拓者でもあった。氏の末弟代情季蔵氏と組んで創案した奇怪な雰囲気を湛えた「山彦人形」は郷土民芸のはしりとも言えるだろう。

このように氏は多方面にわたって多くの業績を残しているが、大阪大学醸造学科在学中に身につけた科学的な思考は氏のあらゆる分野の底流となって、広い視野を持った普遍的な発想の原点となっている。

氏は旧宮村に居住し、「雪解けを待たで西への旅路かな」の句を残して昭和四十三年四月、七十年の生涯を閉じた。生前、氏の人柄と学識を慕って氏の周りに集まった人々は、冒頭に触れたような、心安げな愛称で氏を呼び慣らわしたのであった。

山彦人形